様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００４９６

研究課題名（和文）ベンガル語ベンガル文学の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study of Bengali Language and Literature

研究代表者
丹羽　京子（Niwa, Kyoko）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：９０６２４１１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：現在ではインド、西ベンガル州とバングラデシュの二国に分かれて存在するベンガル地域は共通の言語を用いており、1000年にわたる伝統文化の大部分も共有している。本研究は、国家が分断されたために包括的に扱うことが困難になりつつあるベンガル語とその文化、特に文学を第三者的視点から総合的に扱い、今後の研究を進めるための基礎作りに取り組むものである。
　具体的な成果としては、基礎語彙集作りと様々な論文が掲載された「ベンガル研究」という雑誌の発行を始めたことが挙げられるが、そこに至るまでにもさまざまなセミナーを通して東西の相互理解、そして客観的総合的な理解に努めたという積み重ねも本研究の成果と言えよう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ベンガル語基礎語彙集は、3000語あまりを網羅し、例文を付したもので、ベンガル語を学ぶ学生のみならず、各所でのベンガル語学習者に配布された。ベンガル語には日本語との辞書が存在していないため、この「日本語‐ベンガル語語彙集」は学習の手助けになると考えられる。
　また「ベンガル研究」は、ベンガルを対象にした初めてのジャーナルで、言語、文学以外の内容のものも含み、広くベンガル研究に貢献するものである。日本語、英語、ベンガル語の三言語で書かれたもので、国際的にも通用するものである。さらにその過程で行われたセミナーには多くの参加者を得、活発な議論が行われ、今後のベンガル研究の基礎作りとなった。

研究成果の概要（英文）：Today, Bengal is divided into two countries, West Bengal of India and Bangladesh, but people in Bengal use the same language and share almost the same cultural tradition. This is a project of comprehensive study of Bengali language and culture from the viewpoint of the third party, which becomes rather difficult after partition. This is going to be a foundation for future Bengal Studies.
One of the outcomes is "Bengali glossary for beginners" and the other is publishing " Japan Journal of Bengal Studies". The latter one is the first journal of this kind and it includes various kinds of dissertations, not only on Bengali literature and language, but also Japan-Bengal relationship and translation studies.
We held a couple of international seminars before summing up our project and the presentations from both sides of Bengal and discussion itself was also worthwhile.

研究分野：ベンガル文学、比較文学

キーワード：ベンガル語　ベンガル文学　インド、西ベンガル州　バングラデシュ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ベンガル語は、インドとバングラデシュの 2 国にまたがって用いられ、2 億 8 千万人ほどの話者を有する東インド地域の最大言語である。ベンガル語は 1000 年以上の歴史を持ち、豊かな文学的伝統を有するにも関わらず、長い間公用語として用いられることがなかったため、そして多大な犠牲の末に公用語として用いられるようになった 1947 年以降は国家が分断されてしまったため、この重要な言語および文化圏を包括的に扱うことが困難な状況が続いている。タゴールなどの突出した文学者の研究は、国の内外で盛んに行われてきたが、ベンガル文学全体の包括的な研究は十分に行われてきたとは言い難く、本国における研究も、バングラデシュ側の視点に立つか、インド側の視点に立つかで力点が異なってくるという違いが見られる。また、言語そのものに関しても、どちらのベンガル語を標準とみなすかによる違いがあり、綴り字や一般的な語彙の選択、そして語法の点でも完全に統一的なものとはなっていない。こうした状況は学習者にとって不利になるだけでなく、研究を進める上でもマイナスとなっていた。

２．研究の目的

ベンガル語、ベンガル文化の重要性は言うに及ばず、上記のような状況において、日本においてこの分野の研究を行うことは、客観的で第三者的視点を提供するという観点からも非常に有用であると考えられた。

また、ベンガル語は長い間公用語として用いられることがなかったため、およそ 1000 年にわたって文学用語として発展を遂げてきたという特殊事情を持つ。つまりベンガル語自体の発展は、ベンガル文学の発展と対であり、また、ベンガル文学はベンガル文化の伝統の中核を担うものであると言える。このような観点からベンガル語とベンガル文学を総合的に扱う基礎的研究を行うことを目的とした。

具体的には、東西どちらにも偏らない辞書作りの基礎を固めることと、ベンガル文学全体を包括的に概観することが挙げられる。文学の分野では、文学史的な概観のみならず、バングラデシュ、インド双方の文学の現状について議論し、相互に有意義な関係を持つという協力体制を作ることも目的のひとつであった。

３．研究の方法

まず、辞書作りの基礎であるが、CEFR 基準の A1、A2 レベルを基本とし、学習者が利用可能な語彙集を作成することとした。ベンガル語においては日本語との辞書が存在しないため、日本語‐ベンガル語の辞書もしくは語彙集作りが必須である。また、現状ではベンガル語‐英語辞書を学習者は用いているが、ベンガル語⇒英語よりも、英語⇒ベンガル語の辞書の方がより実用に適さないため、日本語⇒ベンガル語の語彙集が急務であると考えられた。そのため、まずは日本語⇒ベンガル語の実用単語帳を作成することとした。余力があれば、さらにベンガル語⇒日本語の単語帳、そしてそれらを基盤として徐々に辞書のかたちに転換していくことを目指した。

そして包括的なベンガル文学の研究に関しては、インド、バングラデシュ双方の研究者の協力を仰ぎつつ、その発展の歴史や、現状について様々な観点から討議を行い、一定程度の成果物を作成することとした。また、インドとバングラデシュが分離独立に至る前の統合的なベンガル語およびベンガル文学を検討するために、中世のベンガル文学を代表するボイシュノブ（ヴァイシュナヴァ＝ヴィシュヌ派）の詩編を継続的に読み進めることも計画のうちに含まれていた。

幸いなことにインドとバングラデシュの関係は良好で、一堂に会して議論を行うことにはなんら支障はなく、相互に意見を出し合うことも可能であったため、複数の国際セミナーを行うこととした。また、中世のベンガル文学については、現地の専門家を交えて定期的に読書会を行うこととした。

４．研究成果

コロナの影響もあり、延長が認められた上でも多少の軌道修正が余儀なくされたものの、おおよその計画は遂行され、一定の成果が得られたと考えられる。

まず日本語⇒ベンガル語単語帳は、2022 年 3 月に完成することができた。これは 3000 語以上の語彙を含んだものだが、インドとバングラデシュでは異なる語彙に関しても網羅的に収録し、使用状況について註を付した。また学習者の便宜のために、すべての語彙には例文が付されている。さらに巻末には、数詞、後置詞、親族名称などをまとめたほか、日本語で出てくることのな

いベンガル特有の文化事象をあらわす語彙もまとめた。この単語帳は、本学のベンガル語を学ぶ学生はもちろん、各所に配布され、好評を得ている。

次に国際セミナーだが、2021 年度と 2022 年度の 2 回行われた。うち、2021 年度はまだコロナの影響下にあったため、2021 年 9 月 25 日にオンラインで行われた。このセミナーは、「文化の翻訳、文学の翻訳」をテーマとし、日本語からベンガル語、もしくはベンガル語から日本語に翻訳する際の語法的、文化的な問題をさまざまな角度から検討するものであった。ほとんどの発表者は翻訳の経験を持ち、またベンガル人の発表者は日本語を介し、日本人発表者はベンガル語を介すもので占められたため、双方の文化的差異のみならず、言語としての類似点や相違点、そしてそれぞれの学習者にとっての利便性をいかに高めるかといった方面まで議論が進められた。また、インド、バングラデシュ双方から参加を得、それぞれの国での日本紹介や日本研究についても話題となった。このセミナーの成果は、FINDAS International Conference Series（人間文化研究機構　地域研究推進事業　南アジア研究の一環として東京外国語大学に設置された南アジア研究センターの出版物）としてリサーチペーパーにまとめられている。

2022 年度はいよいよ対面での国際セミナーの開催へ向けて準備を進め、2022 年 9 月 21 日に無事東京外国語大学で開催することができた。2 回目のセミナーは”How Emotions Turn into Poetry?”と題するもので、インド、バングラデシュ双方から現代詩人を招き、分離独立以降のベンガルの現代詩の現状を「感情」もしくは「情動」とからめて語ってもらうものであった。残念ながらインド側の参加者 Srijato 氏が来日直前にコロナに罹患したため、来日がかなわなかったが、セミナーにはオンラインで参加し、東西の両詩人によるプレゼンテーションと、コメントおよびディスカッションが実現した。このセミナーは基本的に英語で行われたが、ベンガル詩を扱うため、ベンガル語を介さない参加者のために英訳を付したうえで適宜ベンガル語も用いられた。こちらのセミナーも、SASC International Conference Series（東京外国語大学　南アジア研究センター）としてリサーチペーパーのかたちでまとめられた。

当該研究期間の最後には、それまでのセミナーなどの積み重ねや、新たに構築されたネットワークを生かして、「ベンガル研究創刊号」が東京外国語大学ベンガル語専攻研究室から発行された。これは日本語、ベンガル語、英語の三言語によるベンガルを対象としたジャーナルで、この種のものとしては日本で初めて発行されたものである。ベンガルの歴史や文学、ベンガル語を対象とした言語学など様々な分野の 10 本の論文と翻訳および過去の優秀な卒論の紹介を含むこのジャーナルは総ページ数が 277 頁となり、非常に充実したものとなった。特に日本―ベンガル関係史をテーマにした論文は、バングラデシュ、インド双方から投稿があり、対になるものとして内容的にも高く評価されている。また、三言語で書かれているために、国際的にも通用するもので、2023 年の 3 月に発行されると同時に、海外からも多くの問い合わせを受けている。

具体的な成果物を作成するには至らなかったものの、中世ベンガル文学の読書会はこの期間を通して続けられ、翻訳が着々と用意されつつある。これに関しては今後も読書会を継続し、最終的にはなんらかのかたちでまとめたいと考えている。

以上述べたように、ベンガル語に関する基礎的な作業を行い、また様々な研究活動を通してこの分野の研究に対する多角的な視点が獲得できたことは非常に有意義であったと考えられる。今後はこうした基礎作業や知見を基盤としつつ、より発展的な研究が展開されることを期待したい。

具体的な今後の見通しとしては、まず基礎語彙集を発展させ、辞書のかたちにあらためることが挙げられよう。もともとの計画ではもう少し辞書に近づけるつもりであったが、時間的人的制約もあり、そこまでこぎつけることができなかったのが惜しまれる。

一方で、計画の当初には挙げていなかった「ベンガル研究」の発行は、今後もなんらかのかたちで継続することが決まっており、言語および文化・文学の分野における発表の場を担保するという意味は大きいと考えられる。海外など遠方からの問い合わせも多々あることから、どこからでもアクセスしやすくするために、このジャーナルのデータ化も現在検討されている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 丹羽京子	４．巻 －
２．論文標題 『12か月の家と世界』を訳す	５．発行年 2022年
３．雑誌名 文化の翻訳、文学の翻訳～ベンガルから日本へ、日本からベンガルへ	６．最初と最後の頁 47－64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丹羽京子	４．巻 25
２．論文標題 ベンガル詩と押韻～押韻が先か、詩が先か	５．発行年 2022年
３．雑誌名 総合文化研究	６．最初と最後の頁 45－68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丹羽京子	４．巻 1
２．論文標題 詩人シュバシュ・ムコッパダエの軌跡	５．発行年 2020年
３．雑誌名 南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承	６．最初と最後の頁 43－77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丹羽京子	４．巻 第24号
２．論文標題 タゴールにとっての「異界」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 総合文化研究	６．最初と最後の頁 35－48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 丹羽京子	４．巻 第23号
２．論文標題 ふたつのベンガルの死と死者の表象	５．発行年 2020年
３．雑誌名 総合文化研究	６．最初と最後の頁 26－44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丹羽京子	４．巻 96
２．論文標題 語りとしての「映画」～「チャルロタ」考～	５．発行年 2018年
３．雑誌名 東京外国語大学論集	６．最初と最後の頁 223－242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丹羽京子	４．巻 97
２．論文標題 チョラと近代～シュクマル・ラエのチョラを巡る一考察	５．発行年 2018年
３．雑誌名 東京外国語大学論集	６．最初と最後の頁 226－245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丹羽京子	４．巻 第一号
２．論文標題 1930年代のベンガル詩壇～時代からの展望	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ベンガル研究	６．最初と最後の頁 45-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 丹羽京子、Sajjad Sharif, Srijato
２．発表標題 How Emotions Turn into Poetry
３．学会等名 南アジア国際ワークショップ（東京外国語大学南アジア研究センター）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 丹羽京子
２．発表標題 押韻の喚起するもの
３．学会等名 FINDAS（東京外国語大学南アジア研究センター）研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 丹羽京子
２．発表標題 「十二か月の家と世界」を訳す
３．学会等名 科研およびFINDAS共催研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 丹羽京子
２．発表標題 Tagore and Japan
３．学会等名 160th Birth Anniversary of Rabindranath Tagore, Japan-India-Bangladesh Exchange Event（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kyoko NIWA
２．発表標題 Rabindranath's Desh
３．学会等名 Rabindranath and His India（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kyoko NIWA
２．発表標題 Pedagogy of Teaching Bengali as a Second Language
３．学会等名 International Society of Bengal Studies（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 丹羽京子	４．発行年 2019年
２．出版社 大同生命国際文化基金	５．総ページ数 260
３．書名 地獄で温かい	

１．著者名 丹羽京子	４．発行年 2018年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 163
３．書名 ニューエクスプレスプラス　ベンガル語	

１．著者名 Kyoko Niwa	４．発行年 2022年
２．出版社 Hornbill Press (India)	５．総ページ数 178
３．書名 Rabindranath Tagore and Japan: Collected Essays	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 How Emotions Turn into Poetry 南アジア国際ワークショップ	開催年 2022年～2023年
国際研究集会 文化の翻訳、文学の翻訳	開催年 2021年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関